

## 祈りの言葉

まずは、本年1月1日の石川県能登地方を震源とする能登半島地震により、お亡くなりになられた方々に、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

また、1月2日の海上保安庁の航空機と日本航空の航空機が衝突した事故により、亡くなられた方々に、心から哀悼の意を表します。

今なお復興途上である被災者の救済と被災地の復興支援のために尽力されている方々に深く敬意を表します。

私は、水俣市月浦出月という地域で生まれました。

眼下には水俣湾が広がり、恋路島が浮かび、その向こうには天草諸島が見渡せます。後ろには冷水水源や矢筈岳がそびえる風光明媚な地域です。

毎年お盆の8月には、出月自治会主催で住民手作りの「盆踊り大会」を開催しています。

昨年は地区住民の有志が資金を出し合い、出月の中心に存在していた古井戸に手押しポンプを取り付け、屋根をか

ぶせ、地区の防災対策のため、独自に井戸を整備しました。  
そういう創造的な地域です。

私の父は出月で生まれましたが、戦前、南満州鉄道で働くなかで母と結婚し、戦後水俣へ引き揚げました。引き揚げてからは、父は会社員、母は農業をして暮らしました。

近所には沢山の漁師がいたため、日常的に魚を買い、食べました。また海では牡蠣や、「びな」という巻貝を拾って食べました。とにかく食糧難の時代ですから、何でも食べました。

私が物心ついた頃、海に牡蠣や「びな」拾いに行ったら、死んでドロドロになって、強烈なおおいがしていたことがありました。

海辺でくるくる回って海に飛び込んで死んでいく猫の姿を何度も目にしました。

その頃、近所では多くの水俣病患者が発生しました。

最初に見た水俣病患者は、第一号患者の少女でした。

少女は手足が不自由でしゃべることができず、いつ行っても、布団に寝かされていました。

手や足が曲がり、痩せこけ、よだれをたらし、しゃべることができなくなった大人たちも見ました。子供心に「かわいそうだ」と思っていました。

公式確認よりも前のことで、その人たちは「奇病」と呼ばれていました。私が、その人たちが「水俣病」と知ったのは、ずっと後のことでした。

私の母も、若い頃から「頭が割れるように痛い」といつも言っていました。

めまいがひどく、ふらつき、手足のしびれや、むくみ、からすまがりに苦しんでいました。

薬を飲んでも、治療をしても楽にはならず、その苦しみは生涯にわたって続きました。

そして2000年の12月、肝硬変で亡くなりました。享年79歳でした。

私が大学へ進学する前年、水俣病が公害認定をされ、翌年に裁判が始まりました。

原告には、同じ出月地区の方たちも多くいました。

また、私が生まれた家の目の前に住んでおられた川本輝

夫さんはチッソ東京本社へ行き、直接交渉を行いました。

1973年、患者が裁判で勝訴し、チッソとの補償協定が締結されました。その年、私は就職活動の真っただ中でした。翌年就職し、忙しく働く中では、水俣病を思い出す暇はありませんでした。

2004年、退職を機に水俣に帰郷し、同年に簡易郵便局を開局しました。

その頃に声をかけてくれたのが、水俣高校の同級生でした。「30年も水俣をほっといて。お前何しに帰ってきたんや。」というのが彼の第一声でした。しかし、私の頼み事を引き受けてくれたり、「寄ろ会」や「水俣病センター相思社」とのつながりを持たせてくれたりしました。

おかげで、色んな人たちと仲良くなることができました。30年のブランクも、少しは薄まった気がします。

「寄ろ会」では、菜の花を植えて、種を収穫して菜種油を作り、その油を学校給食に使っていただくように寄付をしました。

また、水銀汚染の犠牲になった全ての生命を追悼し、地

域再生への願いを火に託し、水俣の過去と未来に思いをはせる市民手作りの「火のまつり」での灯りを作りました。

地域にある「水俣病センター相思社」とは、職員の皆さんと近所付き合いをしたり、書籍や写真集を購入したりする中で、水俣病に関する情報を得てきました。

同じ家庭や地域の中で、水俣病の申請をした人、しなかった人、闘った人、そうでない人、さまざまだとは思いますが、水俣病の運動のためにこぶしを振り上げなかった人たちでも、何かしら、水俣病に巻き込まれてきたと思います。

さて、1995年、そして2009年、国は水俣病の全面解決を目指して、水俣の住民、不知火海周辺住民、全国に散らばっている出身者に対して、水俣病の政治解決を図り、また、「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」を制定して、広く被害者救済を行いました。

この施策によって、合わせて65,000人の方たちが救済されました。

この対応に感謝している住民も少なくないと思います。

しかし一方で、現在も救済されず、苦しんでいる方が多くおられます。

水俣病の裁判はつづき、認定申請をする人たちも相次いでいる現状があります。

最後に言いたいこととして、本日の慰霊式にお忙しい中、ご参列いただいている伊藤環境大臣、就任されたばかりの木村熊本県知事、木庭チッソ株式会社代表取締役社長には、患者の現状に真摯に向き合い、全面解決をいただくことを切に望みます。

水俣病による混乱状態が、一日も早く終わることを願っています。

水俣病で亡くなった多くの命を決して無駄にしないように、もう二度と公害病を起こさないようにと願っています。

犠牲になられた全ての命に追悼の意を表します。どうぞ安らかに眠りください。

令和六年五月一日

患者・遺族代表 川畑 俊夫